

## 日本語学術共通語彙知識の発達 (義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較)

田島 ますみ<sup>A</sup>, 佐藤 尚子<sup>B</sup>, 松下 達彦<sup>C</sup>, 笹尾 洋介<sup>D</sup>, 橋本 美香<sup>E</sup>

### 1 はじめに

日本人大学生の語彙力を測定する本研究グループの一連の試みにおいて、日本人大学生は一般語彙よりも学術共通語彙(松下, 2011)を対象としたテストの平均正答率が低くなる結果が得られた(田島ほか, 2016b)。また、一部の大学生は学術的な文献を読むことに支障が出るレベルの語彙量しか習得していないことが示唆された(佐藤ほか, 2017; 田島ほか, 2016a; 2016b)。

そのような大学生は、語彙知識の発達どの段階で停滞しているのだろうか。本研究グループは2016年、首都圏C市教育委員会の協力を得て、C市の公立小中学校において学術共通語彙テストを実施することができた。その結果を大学生と比較して報告する。

### 2 日本語学術共通語彙テストの改訂

小中学生が受けることを考慮し、新たに学術共通語彙テスト・バージョン2を開発した。バージョン2では、対象語の選定をする際に、バージョン1で基準とした語彙頻度レベルに加えて、学術共通語彙に含まれている漢字の割合を統制した。問題項目に学術共通語彙全体の文字種や漢字の学年別の割合を反映させ、語彙頻度と漢字の学年配当が概ね比例するようにした。

他の点はバージョン1と同様とした。漢字の学年配当を考慮しながら、書き言葉コーパスにおける使用頻度上位1286語から2万語の中から250語に1語の割合で対象語を抽出した。このようにして選んだ対象語75語について、語義を問う3肢選択問題を作成した。

### 3 テスト実施概要

上記の手順で作成した学術共通語彙テストを合計

A: 中央学院大学法学部  
B: 千葉大学国際教養学部  
C: 東京大学グローバルコミュニケーション研究センター  
D: 京都大学国際高等教育院国際学術言語教育センター  
E: 川崎医科大学医学部

4,022名の日本人大学生と小中学生に実施した。大学生への実施は、2017年の4月に、2大学で、初年次日本語科目の授業時間内に396名を対象に行った。小中学生への実施は、C市にある公立小学校4年生から6年生1,874名、および公立中学校1,752名を対象に、2016年9月に行った。

### 4 結果

テスト結果全体の内的一貫性は高かった(クロンバック $\alpha=0.95$ )。表1に、小中学校の学年別平均点、標準偏差、最高点、最低点、さらに大学生の結果を示す。大学生の結果は、大学A(私立)と大学B(国立)で有意差が検出された( $t(271.7)=19.8, p<0.000, d=1.87$ )。大学間の得点差はほぼ学生の2学年分以上に相当する。

図1は学年/問題の頻度レベル別の正答率である。小4はいずれの頻度レベルの問題でも正答率は半分以下で、その後、すべての頻度レベルの問題で学年が上がるにつれ正答率は上がっていく。大学生では、問題の頻度レベルに関わらず、8割程度の正答率となる。小5までは、初級語彙のほうが中級語彙より正答率が高いが、その後、中級語彙の正答率のほうが高くなり、その傾向は大学生まで続く。

表1 日本語学術共通語彙テスト Ver. 2 の基礎統計量

	データ数	平均	標準偏差	最大	最小
小4	622	27.9	12.9	62	0
小5	622	35.7	12.7	65	0
小6	630	42.1	12.5	72	0
小学校計	1874	35.3	14.0	72	0
中1	576	45.7	11.2	69	5
中2	605	51.5	10.6	71	0
中3	571	54.5	9.6	73	0
中学校計	1752	50.5	11.1	73	0
大学A	327	60.0	7.4	72	27
大学B	69	70.6	2.9	75	61

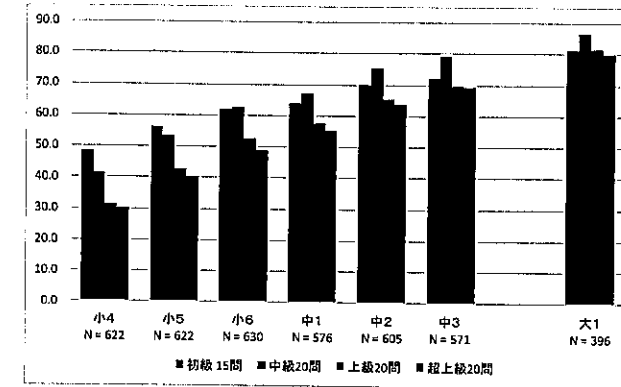


図1 日本語学術共通語彙テスト Ver. 2の正答率  
(学年/問題レベル別)

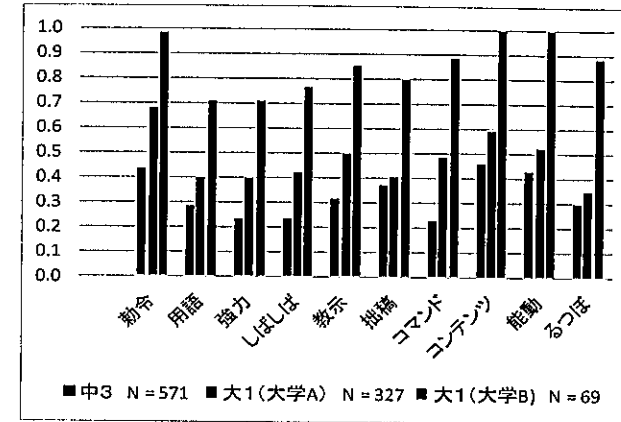


図2 大学間で30%以上平均正答率の差のある語

学年間の正答率の伸びをみると、小4・小5間、小5・小6間で伸びが大きく、そのほかは相対的に小さい。小6・中1間で小さいのは、成績上位層の生徒が私立中学進学などで減っているためである可能性もあるが、学術系の語彙の学習負荷が中学入学で高くなったために伸びなかった可能性も考えられる。その後の中1・中2間で伸びは再び大きくなるが、中2・中3間でまた小さくなる。全体としては、学年が上がるにつれて伸びが小さくなっていく傾向が見られた。

図2に示した語は、大学間で正答率に差の開いた語である。低頻度で、難度の高い学術語彙が多い。大学Aの正答率は大学Bよりも中3に近い。

### 5 考察

今回の結果では、大学Aの学生<sup>21.7</sup>がC市の中3の平均点を下回った。当該大学は学力的には中位以下の大学だと考えられるが、義務教育段階で平均的な生徒が習得している学術語彙を理解できない大学生は、少数の例外的な存在という状況ではない、ということ

は間違いない。今回の大会テーマは高大接続であるが、リメディアル教育は高校から大学への橋渡しだけでなく、それ以前の段階、小中学校からの引き上げが必要な場合があることが示唆される。

また、これら義務教育課程での平均的な学術共通語彙の習得に達していないと考えられる大学生は、大学Aのみに存在した。大学間格差の問題がある中で、文部科学省の求める「卒業時の質保証」、いわゆる出口保証を実現するには、大学での相当な創意工夫・努力が必要である。そのような負担を大学だけに求めるのではなく、高校での出口保証、また中学校、小学校の義務教育段階でも出口保証を検討するべきではないか。大学入試改革で構想されている「高等学校基礎学力テスト(仮称)」はその役目を果たす一つのツールと考えられるが、義務教育段階での出口保証も考える必要があるのではないだろうか。

### 6 今後の課題

大学生の結果が2016年度のものに近似していたことから、まだデータ量は少ないものの、今後、同様のテストを多様な大学で実施し、同じような結果が得られるのであれば、大学生の学術共通語彙の理解度に関して一定の傾向を示せることになるだろう。さらに高校生でも実施し、学術共通語彙知識に関し発達の概要を示せるデータを収集していくことを目指す予定である。語彙量の不足する大学生の問題を検討していくにあたって有用な知見になると考えている。

本研究は、JSPS 科研費 15K02631 の助成を受けた。

### 引用資料

- 松下達彦(2011). 日本語学術共通語彙リスト Ver. 1.01 <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html#jca> w (2017年6月26日参照)  
佐藤尚子, 田島ますみ, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介(2017). 使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発: 50000語レベルまでの測定の試み. 千葉大学国際教養学研究, 1, 15-26.  
田島ますみ, 佐藤尚子, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介(2016a). 日本人大学生の日本語語彙量測定の試み. 中央学院大学人間・自然論叢, 41, 3-20.  
田島ますみ, 佐藤尚子, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介(2016b). 日本人大学生は学術共通語彙をどの程度理解しているのか. リメディアル教育学会第12回全国大会発表予稿集, 118-119.

## 謝辞

ご出展及び広告のご掲載をいただきました企業様、団体様に心より感謝申し上げます。  
本大会をご後援いただきました日本文理大学、大分県教育委員会、大分高等教育協議会、大分合同新聞社に謝意を表します。

### 日本リメディアル教育学会第13回全国大会運営組織

日本リメディアル教育学会

会長： 寺田 貢（福岡大）

第13回全国大会実行委員会

委員長： 吉村 充功（日本文理大） 副委員長： 鈴木 照夫（日本文理大）

委員： 坂井 美穂（日本文理大）、前田 和宏（日本文理大）、西野 麻美（日本文理大）、  
首藤 マリア（日本文理大）、大津 智（日本文理大）、嶋田 奈々恵（日本文理大）、  
古庄 朝美（日本文理大）、山下 佳亮（日本文理大）

全国大会企画委員会

委員長： 小松川 浩（千歳科学技術大） 副委員長： 中園 篤典（広島修道大）

現地実行委員長： 吉村 充功（日本文理大） プログラム委員長： 佐藤 尚子（千葉大）

幹事 専門部会企画担当： 森川 修（鳥取大） 賛助会員担当： 小野田 正之助（近畿大）

プログラム担当： 田島 ますみ（中央学院大）、國弘 保明（川崎医療福祉大）、  
鈴木 政浩（西武文理大）

大会優秀賞担当： 小松川浩（千歳科学技術大）

運営アドバイザー 御園 真史（島根大）、矢島 彰（東大阪大）、寺田 貢（福岡大）

#### 日本リメディアル教育学会 第13回全国大会発表予稿集

発行日： 2017年8月21日

発行者： 日本リメディアル教育学会

編集： 日本リメディアル教育学会全国大会企画委員会

事務局： 日本リメディアル教育学会全国大会企画委員会

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

印刷： （株）国際文献社

Copyright © The Japan Association for Developmental Education 2017

Printed in Japan